北里柴三郎と福沢諭吉と野口英世はどんなつながりがあるのでしょう

北里柴三郎は、前号で紹介しました渋沢栄一と同じく 2024 年新紙幣（千円札）肖像となる人物です。

北里柴三郎は、1852 年、肥後熊本の庄屋の子として生まれ、成績優秀で、藩校時習館から東京医学校（東京大学医学部の前進）に学びました。その後内務省に入り、ドイツへ国費で留学しました。そこで、細菌学の世界的権威コッホに学び、破傷風菌を人工培養し発症させると、免疫が生じることを発見しました。

この免疫を使って治療に応用したのが、血清治療です。この研究は、第１回ノーベル賞を獲得した大発見でした。ところが、この研究を一緒に行っていたドイツ人のベーリングだけが第 1 回ノーベル賞を受賞し、北里は受賞できませんでした。明治維新になって初めて西洋医学を学んだ日本人がそんな偉大な発見をするわけがないという偏見があったためと言われています。帰国後、慶應義塾大学を創設した福沢諭吉（現１万円札の肖像）の支援で、慶応義塾大学横の三田、芝公園に土地と建物を譲り受け、伝染病研究所を設立しました。その後、港区白金台の土地に移りましたが、そこは現在の東京大学医科学研究所です。

福沢諭吉は、「学問のすすめ」の中で「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」という言葉で人間の平等をわかりやすくあらわした思想家であり教育者です。

北里柴三郎が所長を務めていた伝染病研究所は、赤痢菌を発見した志賀潔、黄熱病の研究で知られる細菌学者の野口英世（現千円札の肖像）など、優れた人材を輩出しました。野口英世は、英語が堪能だったので研究所では、研究者というより通訳として北里柴三郎に仕えていました。

野口は、福島県会津の猪苗代町の貧しい農家に生まれ、母と二人で暮らす毎日でした。ある日、母が畑仕事に行っている間に囲炉裏に落ちて、大やけどをしてしまい、指が縮んだまま動かなくなってしまいました。そんな子を不憫に思った母は、せめて読み書きだけでもさせたいと、毎日、囲炉裏の灰に火鉢で字を書いては消し、書いては消しを繰り返して、読み書きを覚えさせたのです。その努力の甲斐あって学校では最も優秀で、地元の人たちがお金を出し合い、固まった指を五本に切り離す手術を受けさせたことで指が動くようになりました。その後、医師になって恩返しをしようと上京して、北里柴三郎に学ぶことになりました。医師としても優秀で、アメリカに渡り、黄熱病の研究で一躍世界的に有名になりました。その後黄熱病の研究のためアフリカのガーナに渡り研究に励みましたが、自ら黄熱病にかかり、亡くなってしまいました。今でも、ガーナには、野口学校などもあり、ガーナの英雄とされています。私は福島県出身なので、よく小学生のころ、「野口英世先生のような立派な人になりなさい」と学校で教えを受けた記憶があります。

「細菌学者の父」と言われた北里柴三郎より、弟子である野口英世が先に日本の紙幣になったのですね。

2024 年新紙幣に北里柴三郎の顔が載ることで、師弟の偉大な業績が改めて国民に広がっていくのだと思います。

北里柴三郎は、当時江戸時代以来の医師の組織からバッシングを受けるなど、なかなか日の目を浴びませんでした。そのような中でも、お世話になった福沢諭吉のために、慶応義塾大学に医学部を設立しました。現在は、白金台の東京大学医科学研究所と聖心女子学院の丘の下に、北里大学医学部・薬学部があります。北里柴三郎は、「細菌学の父」であるばかりか、まさに日本の近代医学の礎を築き上げた偉人なのです。